

タイトル	『しづくににごる』錯簡考
著者	関本，真乃；SEKIMOTO, Masano
引用	北海学園大学人文論集(80)：142(一)-113(三〇)
発行日	2026-03-31

本物語は、作中和歌が文永八年(一二七一)成立の『風葉和歌集』に二首入集することから、その成立以前に成立したことがわかる。成立の上限については以前拙稿で推測したが、鎌倉時代成立であろうことを示すために改めて簡潔に述べる。

作中では、中宮所生の唯一の皇子女である一品宮が、異母弟である幼帝の准母的存在を担う。このあり方は、史上の昇子内親王の例を踏まえた可能性が高いと考えられることから、本物語は、その立後の承元二年(一二〇八)以後の成立であろう。加えて、准母の役割を果たすことと立后が必ずしも結びつかないという描かれ方は、鎌倉中後期に特徴的な不婚内親王の一例と捉えることもできる。また、皇后宮となる尚侍が登場する点は、鎌倉時代中期に成立したとされる『いほでしのぶ』『我身にたどる姫君』と共通している。これらのことから、『しづくににごる』も鎌倉中期、後嵯峨院時代に成立した可能性があることを指摘した。

依然として残る本物語の大きな問題の一つは、前半部が散逸していることに加え、現存部分にも錯簡・散逸があり、物語の全体像を把握することが難しいことである。本稿は、錯簡部分の復元案を提示することを目的とする。

二、錯簡について

錯簡は親本の段階では既に起きていたと考えられ、小木喬氏⁽⁵⁾、樋口芳麻呂氏⁽⁶⁾、田邊サヨコ氏⁽⁷⁾、室城秀之氏⁽⁸⁾らの復元案が示されている。そのほか市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』(以下『集成』)では錯簡と思しい箇所「錯簡アルカ」⁽¹⁰⁾と傍記される。錯簡が考えられる部分について、これまでの先行研究を基に私案を示していく。本文は『集成』による。以下、錯簡がある部分を、現存本文の順序に従って①～⑬に区切り、本文のまとまりの先頭に私に数字を付す。また、話者や状況を()内に適宜補って示す。

錯簡が始まるとされるのは、帝が中宮所生の姫宮に向けて、亡き尚侍が生んだ若宮（第一皇子）の処遇について述べる場面である。十四丁裏八行目から十五丁表四行目の、

①（帝が姫宮に対して）「…（若宮をあなたの）御こにせさせ給て、わが侍らざらむをりのかたみとも御らんぜよ。七日すぎなば、むかへとりてあづけたてまつらん」とおほせられて、いみじげなる御氣しきに、いとゞみめみやも御袖しほるばかりになりぬるを、をのづからちかく候人は見きこえたてまつるに、なみたとゞめがたかりけり。（以下、傍線等を私に付す）。

という部分の傍線部「いとゞみ」と「めみや」の間に『集成』は「錯簡アルカ」とする。それ以外の先行研究では①の直後の、

②との、うゑ、内侍督の事どもたまふ。わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける、きさいのくらひをくらせ給けることなど、こまかにきかせ給に、中納言は（一五丁表四行目く九行目）
③いかばかりあはれにおほしめすらんとおもふに、われをもうしとこそはおほしめさるらめとおほす。（一五丁表九行目く一一行目）

という部分②③が①にそのまま接続するの可否かが争点である。

以降錯簡が指摘されているのは二十一丁表七行目までである。錯簡部分の作中時間は、尚侍の葬送の後からその四十九日までに相当する。

以下、主に現存本文の順に添いながら錯簡について検討していく。

(四)

三、①②③の接続

三一、②

樋口氏は錯簡部分の順序について、①の後に「現在は散逸してしまっているが、中納言が伏見で忌みにこもることなどが描かれていたのではないか」としたうえで、

⑨げにめでたかりしありさま、よの中の人、このごろあはれなるさたにぞしける。(以下一七丁裏まで白紙)(一七丁表五〜七行目)

という、尚侍の死後の評判を描く⑨が来ると推定する。田邊氏は樋口氏の復元案に基本的に賛同しつつも、①には帝が若宮に初めて対面する⑩⑪が接続するとする。

⑩御かどは、つねならぬよと、ふかくおぼしとりつれば、なにごとくかずならず。七日すぎぬれば、よき日してわかみやむかえたてまつりて、見たてまつらせ給に、御かゞみのかげかはらぬものゆえ、は、の御さまも思いでられさせ給に、おもひすてつるよも、心のやみはくるしかりけりと、いと心ほそくおぼしめさる。(一八丁表一〜九行目)

⑩ひめ宮、一ほんのみやになしたてまつらせ給て、その御かたに一のみやはおはしまさせたまつらせ給に、かたぐゝの、あはれにも、おろかにおぼしめされんやは。ともすれば、いだきあつかはせ給を、中宮は心づきなくおぼしめされるれど、は、のをはせばこそはめざましからめ、いま、でまうけの君もをはしまさぬに、ひめ宮の御ため、ゆくすゑたのもしくおぼしめしをきつるも、さすがにあはれにおぼえさせ給へば、おぼしもはなたれず、みたてまつりなどせさせ給に、いまより気しきことに、たゞうゑの御かほ、うつしとりて、又は、かたさえそひ、なべてならぬさまを、（一八丁表一〇行目～一九丁表四行目）

室城氏は①に「七日すぎなば、むかへとりてあづけたてまつらん」とあることから、「帝が、姫宮に、七日の産養いが済んだ後に若宮を迎えることを依頼する発言がある」と指摘する。そして②の「わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける」の部分について、「過去の助動詞「けり」があるように、すでにいつのまにか若宮が迎え取られている。この間に、若宮が迎え取られる記事が必要だと思われる」とし、①には、「七日すぎぬれば、よき日してわかみやむかえたてまつりて」という描写のある⑩⑪が接続するとする。

しかし室城氏のように捉えると、「わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける」の直後に、尚侍に葬送時皇后宮を贈ったという、若宮が迎え取られる前の出来事が語られていることになり、時系列の逆転が起きていることが気になる。加えて、尚侍の死以前に若宮は宮中のどこか、おそらく尚侍の使用していた殿舎と思われる場所に渡っていたことが以下から読み取れる。

うちには、わか宮わたらせ給えりときかせ給にも、は、ながらとおもはましかばと、それにつけても御むねふたがらせ給て、さい将の文まいらせ給えるをも、ゆめかとまで御心さはぎして、御らんずれば、∴。（四丁表一一行目

〔四丁裏六行目〕

(六)

とすれば、「一日ばかりおはしける」とは、若宮が宮中に到着して一日ばかりで尚侍が亡くなったということの意味する可能性があるのではないか。尚侍が亡くなったのは若宮を迎えてから一日ばかりのことであったこと、その後帝が亡き尚侍に皇后宮の位を贈ったことなどを、誰かが誰かに話したという解釈の方が、出来事の語られる順番としては自然である。

同様の見解としては、小木氏は⑩を②以後とし、②を「葬送まもなくの事」としている^⑪。また『集成』では、この部分には「錯簡アルカ」の指摘はない。先述したように①の「めみや」以降に錯簡を想定しており、①の最後と②は続いていると考えている可能性が高い。

では、若宮が宮中に着いてから尚侍が亡くなるまでの経過時間は「一日ばかり」なのだろうか。結論から述べると、おおよそ若宮が一日ほど宮中に滞在した時点で、尚侍が亡くなっていると考えて支障ない。

以下、本題から逸れるが、若宮が宮中に入ってから時間の時間について考える。物語冒頭で、若宮は夜に宮中へと移動している。尚侍は、若宮が皇子として参内することに対して、その直前に「帝が」おぼしすて「なかつたことも嬉しいと感じているので、それまでは帝が生まれてくる子に対してどういった対応を取るかかわかっていなかったと読み取れる。したがって帝は、若宮誕生の報が伝えられてから若宮を宮中へと迎えることを決定し、若宮を迎えるために女房を遣わしたということになる。出産当日にそれらが全てなされ、若宮が移動することは現実的ではない。

若宮を宮中に迎えた後、帝は「わか宮わたらせ給えり」と耳にして、尚侍の不在を嘆きながら彼女からの手紙を読む。その後の描写は以下の通りである。

宰相中将は、おぼつかなくこもちの事おほしやれど、わかみやの御こともみすてがたくて、さぶらひ給。御ゆどの、ぎしきなどは、たゞたちそひたまはずといふばかりこそあれ、御つるうち、れいのことなれば、きよげにさわりなきをえりすぐりて、五位十人、六位十人、御ゆどの、ぐそく、なのめならぬことゞもなり。なに、にも、「今上一のみこ」とかきつけられたるをも給。（五丁表九行目〜五丁裏一〇行目）

傍線部「御ゆどの、ぎしき」すなわち「御湯殿始」は、皇子が生まれた当日もしくは翌日等の吉日を選んで行われるとされるが、鎌倉期に入ると、確認される例では誕生の翌日以降の実施が普通である。かつ、院政期以降は三夜・五夜の産養等と同日もあり得た。⁽¹³⁾ すなわち、作中で描かれる「御湯殿始」は、素直に読めば宮中への移動とおそらく同じ日に行われ、それは若宮誕生の翌日以降だと考えられる。

そして帝は「一日の御文などのあはれさに」と、尚侍の亡くなった日に、この日に読んだ尚侍からの手紙のことを思い出している。したがって、若宮が宮中に入った日と、尚侍の死は別の日である。

加えて尚侍の兄の宰相中将は、帝から「わか宮の五夜、七夜の程にさぶらはせ給へ」と言われ、そう心づもりしていたところに尚侍の訃報を受けた。つまり、この帝の発言の時点で、おそらく三夜は既に過ぎていた。三夜の産養が既に終わり、五夜の産養が行われない時点、すなわち若宮誕生四日目もしくは五日目の遅くない時分に尚侍が亡くなっていると考えられる。

帝の宰相中将への命がいつのことかは判然としないが、御湯殿始の後の描写なので、その

表1 若宮の行動と尚侍の死の時期の可能性

若宮誕生 (1)	(2)	(3)
1日 誕生	誕生	誕生
2日 夜移動・御湯殿始		
3日 三夜	夜移動・御湯殿始・三夜	三夜
4日 尚侍死	尚侍死	夜移動・御湯殿始 尚侍死
5日		

後のことだとすると、以下の三つの可能性がある(表1参照)。(1)若宮誕生二日目に宮中に移動して御湯殿始、翌日に三夜の産養をした後に帝からの命があり、誕生四日目から五日目にかけて尚侍が死亡した。もしくは、(2)若宮誕生三日目に若宮を宮中に迎えて御湯殿始を行い、三夜の産養も描かれていないが実施され、尚侍は若宮誕生四日日夜以降に亡くなった。もしくは、(3)若宮三夜の産養終了後、誕生四日日夜に宮中に入って御湯殿始、五夜の産養の前に尚侍が亡くなった。

なお三夜の産養の主催者は尚侍の兄宰相中将である可能性が高く、若宮に付き添っている宰相中将であれば、産養についても融通は利いたと考えられる。

つまり、いずれにせよ、おおよそ若宮が一日ほど宮中に滞在した時点で、尚侍が亡くなっていると考えると不都合ないのであり、①②がそのまま接続することに不自然さはない。

ただし、そう解釈するとしても②③は難解である。②③を再掲する。

- ②との、うゑ、内侍督の事どものたまふ。わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける、きさいのくらひをくらせ給けることなど、こまかにきかせ給に、中納言は
- ③いかばかりあはれにおぼしめすらんとおもふに、われをもうしとこそはおぼしめさるらめとおぼす。

室城氏は②③の主語を「殿の上」(関白の北の方)と解し、以下のように訳す。

殿の上は、帝が、いまだに内侍督のことをいろいろとお話しになっていること、若宮を姫宮のもとにお迎え申しあげて、一日ほどおいでになったこと、内侍督に後の位をお贈りになったことなどを、細かにお聞きになると、「中

納言は、どれほど、悲しく思っていらいっしやることだろうか」と思うにつけても、「中納言は、私のことを、恨めしいと思っていらいっしやることだろう」とお思いになる。

しかし作中「おほしめす」は、勝山幸人氏が「何れにしても、「思す」と「思し召す」は、比較的よく使い分けられているように思われる」と指摘する通り、帝・中宮・一品宮を主体とする用例がほとんどであり、③の傍線部 a「おほしめすらん」、b「おほしめさるらめ」の主語が中納言と解されることには違和感がある。⁽¹⁶⁾

小木氏は③について、「中納言が総主語で、「あはれに思し召す」われをも憂しと思し召すの主語は、帝であろう」とする。樋口氏も③の二か所の「おほしめす」の主語が帝であるとしたうえで、②末尾の「中納言は」の直後に錯簡があるとする。樋口氏は、③は⑪末尾の「は、かたさえそひ、なべてならぬさまを」に接続するとし、これを中宮が若宮を見ている場面だと捉える。そして若宮のことを帝がどれほど愛しく思うかと考えると、帝は自分のことを「憂し」と思うだろうと中宮自身が想像する場面と解す。このように、②③については諸先行研究でも解釈が分かれるところである。本稿ではまず②の傍線部「こまかにきかせ給」に注目する。「聞かせる」の意であるなら、室城氏の示す通り、主語が「殿の上」の可能性はある。しかし作中の用例を見る限り、「聞かせ給ふ」は二重敬語で、その主語は、帝・院・中宮であることがほとんどである。⁽¹⁷⁾『いはでしのぶ』や『吾の衣』、『我身にたどる姫君』等のおおよそ同時代成立と推測される物語においても同様の傾向が見られる。⁽¹⁸⁾

すなわち②は、「ども」を複数の事柄を表していると取り、誰かが皇族の誰かに、殿の上および尚侍のことを語る場面であると想定できる。この場面で、帝・中宮・姫宮のうち、殿の上や尚侍の死について聞かされるのに相応しいのは、それらについてこの時点で知り得ず、殿の上の娘であると考えられる中宮である。

だとすると、それらを語る人物の候補には、中宮の夫である帝、娘の姫宮、父関白が挙げられよう。中納言は中宮の

弟と考えられるが、死穢に触れて籠居しているのでここでは候補に該当しない。帝と中宮には帝の出家直前まで対面する描写がなく、また帝が殿の上のことを話す必然性もないことから、話者は帝ではないだろう。また、父関白が突然後宮に登場するよりも、①に登場する「(ひ) めみや」が話者であると考えた方が自然である。

つまり『集成』が指摘する通り、①は「とおほせられて、いみじげなる御氣しきに、いとゞみ」あたりで帝と姫宮が会話する場面が途切れ、その後に錯簡・散逸が想定される。そして場面が転換され、姫宮が中宮に対面する場面に続いていると推測できる。

以下に示すように、②は①末尾にそのまま続く可能性があるかと解釈しておく。

(ひ) めみやも御袖しほるばかりになりぬるを、をのづからちかく候人は見きこえたてまつるに、なみだとゞめ
がたかりけり。〈①末尾〉

② (姫宮は中宮に) とのゝうゑ、内侍督の事どもたまふ。「(尚侍の死は) わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける(時のことであった)、(その後葬送に際して) きさいのくらひをくらせ給けること」など、(中宮は) こまかにきかせ給に、中納言は

三一一、③

次いで③末尾の「おぼす」の主体について検討する。小木氏は中納言、樋口氏は中宮だとし、室城氏は殿の上、勝山氏は殿の上もしくは中宮であるとす。この人物は自分が「憂し」と思われることを自覚しているのであるから、散逸した前半部で、尚侍に関わる事件を引き起こした側の人物である。

中納言が「おぼす」の主体だと仮定すると、中納言を「うし」と思うことがありえるのは帝であるが、現存本文中帝から中納言への感情は「びんなき」で一貫していること、また中納言の場合、自身がおそらく尚侍退出の原因であり、帝から最も「憂し」と思われて当然の存在であるため、「我をも」の「も」は必要ないこと等を併せて考えると、中納言はその主体ではないと推定される。「おぼす」の主体としてはやはり、殿の上もしくは中宮が候補に挙がる。

いずれが「おぼす」の主体として自然であるかを考えるにあたって、本稿では殿の上の言動と性格に着目したい。二十一丁裏で、殿の上は、中納言がいつまでも籠居していることについて「よしなかりけるわざ」と口惜しく感じている。

ごん中納言は、よにをそれてまいり給はず。またびんなき人と、ふかくおほしめしてしかば、「まいり給え」ともめさず。はしたなき事どもあるべけれども、いまはこの世にても、かくてもとおほしめせば、おほしめしかへず。いつとなくこもりゐたまへる、との、うゑは、よしなかりけるわざかなと、くやししくおぼえ給。〔二一丁裏四行目〕
 〔二二丁表二行目〕

また、殿の上の性格は⑥後半の十六丁表で次のように描かれる。

とのうゑ、いまくしくおこがましくもあり、「なにしにさては、いつとなくおはすらん」と、かたぐにのたまふも、ことわりなり。〔⑥後半／一六丁表二行目〕
 〔一六丁裏三行目〕

彼女はおそらく、息子の恋慕を叶え、娘の中宮の競争相手である尚侍を引きずり下ろすという一挙兩得を目論んだのであろう。とはいえ、息子に理解があるわけでもなく、いつまでも涙にくれ、尚侍のことばかり考えている息子を苦々し

く思うという、悪役的人物造型がなされていると言えよう。これは、妻を亡くした『苔の衣』の大將に対してその両親が、「かくて籠り居給ひたるをいと口惜しく思²¹⁾」うのと比較しても、無理解の程度は上である。

つまり樋口氏、室城氏の指摘する通り、

⑧「すぞろなるもの思してをくりし。いみなどにさへこもりて、なきこがれたまふ」などきゝて、「いまくしくよしなきことなり。みかどには、ながくびむなき物におもはれまいらせて」とおぼせど、われらが心あはせてしいで、しことなれば、えかくも物ものたまはず。(一六丁裏八行目～一七表丁五行目)

で中納言が泣き焦がれていることを聞き、それを「いまいましくよしなきこと」と感じる人物は、「いまいまし」「よしなし」といった語彙が共通して用いられていることから、「殿の上」が最も自然であろう。中納言が帝に「びむなき物」に思われた原因について、「われらが心合わせ」てやったことだと述べている、この「我ら」の一人は、「殿の上」であると言えよう。なお帝が、姫宮(のちの一品宮)に向かつて、

「内侍督はうせ侍にける。にくしといひながら、よしなきことをさへしださせ給て、それにより、は、宮をもうしと思とりきこえて、人もいたづらになりぬるは、うきことにあらずや。…(一四丁表八行目～一四丁裏二行目)

と述べていることから、この尚侍に関わる企みと不始末には、姫宮も関わっていると見てよいだろう。²²⁾

一方殿の上の娘と考えられる中宮はどういう人物であろうか。「よしなきこと」を姫宮たちが実行した結果、帝から中宮への隔意が生じたのである。讓位した帝(院)が、出家前に中宮(このとき女院)に最後に対面した時にも、「よ

しなきことひとつにより、われも人も心をきてたてまつりにし」と述べているが、ここでは「しださせ給」等の表現はない。つまり、室城氏も指摘する通り、中宮はこの事件自体には関わっていない可能性が高い。

中宮が帝と最後に対面する場面を示す。

さま／＼にあはれることゞもをきこえあかして、あくる日ぞかへらせたまふ。いかにおほしなるにかと、あはれにおぼさる。(二五丁表七行目～一〇行目)

一つの山場であるはずのこの場面で、中宮の心情描写は「あはれ」に思うという簡潔なものに留まる。このように中宮の心情、内面の描写は現存部分ではあまり見られない。このほか中宮の心情が描写される箇所を挙げ、傍線で示す。

ともすれば、いだきあつかはせ給を、中宮は心づきなくおほしめさるれど、は、のをはせばこそはめざましからめ、いま、でまうけの君もをはしまさぬに、ひめ宮の御ため、ゆくすゑたのもしくおほしめしをきつるも、さすがにあはれにおぼえさせ給へば、おぼしもはなたれず、みたてまつりなどせさせ給に、いまより気しきことに、たゞうゑの御かほ、うつしとりて、又は、かたさえそひ、なべてならぬさまを、(⑪後半／一八丁裏三行目～一九丁表四行目)

女院も、内侍督ことゆえにこそ、かたみに御心をかれたまひしか、そのさき／＼は、いづれの御かたさぶらひ給へど、われをばすぐれて、えさらぬものにこそおぼしたりしか。一ほんのみやの御ことを思きこえ給えば、いかでかおろかにおもはん。おほせられし御こともあはれなれば、うちのうゑの御事をば、わが御こにもをとらず、一ほんのみやとをなじくおもひはごくみたてまつらせ給。をもかげをとりとめ給へるを、見るもいみじくて、

みどり子を見るたびごとにかなしきをつらきゆかりとなに思けん

と、女るんは、あやにくにたえぬ御なみだなり。(三〇丁表一―行目―三二丁表六行目)

(一四)

尚侍の存在は「めざまし」いものではあり、尚侍の存在によって帝と隔意が生じたことは描かれるが、それも自然のなりゆきとして納得できる範囲に収まる。「あはれにおほえ」る、「あやにくにたえぬ御涙」などと、中宮は一貫して人間らしく、思いやりの心がある人物として描かれており、いわゆる悪役とは言えない。

対照的に悪役を一手に引き受けているのが、殿の上である。先述した通り、殿の上は、「私のことをも、恨めしいと思つていらつしやることだろう」と他人の感情の動きを思いやり、自分が恨まれることを当然だと納得するような人物ではないと推測できる。

したがって、「われをもうしとこそはおほしめさるらめ」と思う主体は、殿の上ではなく中宮である蓋然性が高い。そう考えたとき、この「おほしめさるらめ」の主体は、敬意の高さからするとやはり帝がふさわしい。③冒頭の「いかにばかりあはれにおほしめすらんとおもふに」の「おほしめすらん」についても同様である。⁽²³⁾

あわせて、中納言は「たゞわれゆえぞかし」と尚侍の死について罪の意識に苛まれ、己を責めているのであるから、誰か他人を「憂し」と思うような心境ではない。中宮を「憂し」と思う可能性が最も高いのは、やはり帝である。

②③の間に錯簡がないのであれば、「おほしめすらん」の主語は中納言しかありえないが、そうすると「中納言はどれほどしみじみとお思いであろうと(中宮は)思うと、(帝は)私のことをもいやだとお思いだろうと(中宮は)お思いになる」となり、因果関係が不明で不自然である。とすれば、②末尾「中納言は」は③冒頭には直接接続しないと推測できる。

③で中宮が帝の心情を思い遣っているとすると、③はどこに接続するだろうか。中宮の帝に対する心情が描かれるに

相応しいのは、姫宮と話す場面②、もしくは姫宮が若宮を可愛がるところを見る場面⑪であろう。すなわち③は、②の直後に散逸した部分がありつつもその後接続するか、もしくは樋口氏が指摘する通り⑪に接続する可能性がある。あくまで憶測に過ぎないが、より自然なのは、帝にそっくりな若宮を見た⑪の後で、帝のことを中宮が思い遣っている場合であろうと考える。

なお⑩と⑪は、場面は転換しているが、話の内容には断絶はなく、そのまま続いていると考えられる。⑩の位置については次章で考える。

四、④以降の錯簡

四―一、帝の心情の変化

②③に続き、帝の心情を描く一文④を示す。

④うゑはおほしめしたつ御ことも、心もとなくおほしめさる。（二五丁表一一行目―裏二行目）

④がどこに入るかを考えるために、錯簡部分前後における帝の心境の変化について考えておきたい。尚侍の死後、帝は次のように出家を思う。

「いまはいかにおほすとも、この世にはかひなき思なり。かばかりうきことを見るく、よにありてなに、かはせん。

きしかたゆくさきも、これにまさる思、我身にはあるべからず。このついでに、かゝるうき世をおもひすて、つみふかくもの思いでうせにし人をも、いかではちすの露となさん」とおほしめしけるにも、「一宮の、物、心し
 ませたまはんまでは、あらまほしけれど、それまでながらふべきならず」などおほしつゝくるに、この世はたゞゆ
 めまほろしとのみ、おほしめしすてさせたまふに、なをこの御心のやみにまよひぬべくおほしめすぞ、くちをし
 りける。(二三丁表八行目〜一四丁表一行目)

そして、「うき世」を思ひ捨てようと思ひ、この世を夢幻だと思ひ捨てる。しかし、若宮との初対面はまだであり、子どもへの愛着に迷いそうだと感じている。

錯簡部分における帝の心情、出家への思ひは④以外にもう一箇所描かれる。⑩を再掲する。

⑩御かどは、つねならぬよと、ふかくおほしとりつれば、なにごとみかずならず。七日すぎぬれば、よき日してわかみやむかえたてまつりて、見たてまつらせ給に、御かゞみのかげかはらぬものゆえ、はゝの御さまも思いでられさせ給に、おもひすてつるよも、心のやみはくるしかりけりと、いとみほそくおほしめさる。

無常を悟った帝は、若宮と初めて対面し、「おもひすてつる」この世ではあるが、わが子への愛情ゆえに心細く思う。ここでは「すてつる」と完了形であることから、尚侍の死の直後よりも現世への執着が無くなっていることが読み取れる。しかし、いまだ出家の思ひははっきりと言葉にされていない。

錯簡部分の後に描かれる帝の心情は以下の通りである。

御かどは、月日のすぎゆくも心もとなく、いそがしくのみおぼしめすに、……うちは、よるひるねん仏にこゝろをいれても、なをあぢきなくおぼしめせば、おりゐなんの御心あるべし。（二二丁表七行目～二二丁表五行目）

右の場面では、出家せずに念仏しているだけで月日が過ぎてゆくのも気がかりだと考え、退位を決意している。既に出家が現実的に志されていると読み取れるだろう。この後帝は讓位を果たし、念願の出家を遂げる。

改めて④「うゑはおぼしめしたつ御ことも、心もとなくおぼしめさる」を解釈すると、これは出家することを思い立ち、早く出家したいとじれつたく思ふ心の動きである。⑩にはなく、錯簡部分の後の心情と一致するものがあるところから、両者の間にあると考えるのが自然だろう。

つまり、順序としては⑩の後に④が来ることは確かだと考えられる。⑩の「七日すぎぬれば」の「七日」は産養を指すのではなく、穢に関わる期間であると考えられるが、⁽⁵⁾ともかくも若宮と帝が対面したのは誕生七日目以降の吉日であり、尚侍の死からさほど経っていない時期であると推測できる。④の位置については、後で考える。

四―二、中納言の心情の変化

⑤ふし見には、かなしといへど、御いみもすゑつかたになりゆくに、一みやにことづけたてまつりて、こちたきまで御とぶらひあり。おほやけざたなれば、さはいへども、よの中のひゞきにぞありける。なに、つけても、めでたき人の御ありさまにぞありける。（二五丁裏二行目～九行目）

④に続くこの部分では、「御いみもすゑつかたになりゆく」と、尚侍の忌みが終わりをかけている。錯簡部分は尚侍の葬

送から四十九日までを描くので、⑤は錯簡部分の中でも後半に当たることがわかる。④と⑤、⑤と⑥の間に錯簡を認める積極的な微証はない。本稿では特に積極的な微証がない限り、現在の順のままと考えの方針を採り、④⑤⑥は続くと考える。次いで⑥の中納言の心境について考える。

⑥中納言^(マ)は、このよにはちぎりをはせざりける人に、をこがましく、いたくなげかじとおほせど、「たぐひなかりし御さまは、なにならざらん人とても、おろかに思ふべかりし御ありさまかは。ほうしにもならまほしく、」なに、かへたる身ともなくや」と思ふばかりにと、こほり給えど、いまはのきはにしも、あはれをしらせたまはんの御気しきは、この世ならでも思わするべきよしなかりけり。いかなる人を見るとも、つゆなぐさむかたは、あるべきならず。とのうゑ、いまくしくおこがましくもあり、「なにしにさては、いつとなくおはすらん」と、かたぐにのたまふも、ことわりなり。(一五丁裏九行目〜一六丁裏三行目)

尚侍が息を引き取った直後の中納言は次のように描かれる。

中納言、いまはざりともと、おもふことなくおほえつるも、むなしく見なしたてまつる心地、「あるまじきわざをして、神仏のしわざなめり」と、なき人にそひふしてなきこがれたまふさま、あはれなり。……のちの世にだに、おなじはちすの露とむすば、やとおほしまどふさま、ましておなじ心にあはれをかはし、まことのちぎりにておはせましかば、この世にもとまり給はざらまじと、見たてまつる人くも、いとをしき心地どもは、もよをさる、心地ぞしける。(八丁裏八行目〜九丁裏九行目)

中納言は尚侍の死によって、彼女に泣き焦がれ、思い惑う様子であった。しかし⑥に至って中納言は「いたくなげかじ」と思っている。この心情に至るには、死に直面した動揺から立ち直る時間の経過がないと無理であろう。比較対象として⑧を示す。

⑧「すぞろなるもの思してをくりし。いみなどにさへこもりて、なきこがれたまふ」などぎゝて、「いまくしくよしなきことなり。みかどには、ながくびむなき物におもはれまいらせて」とおぼせど、われらが心あはせてしいで、しことなれば、えかくも物ものたまはず。(一六丁裏八行目―一七表丁五行目)

「をくりし」は、葬送に参加したことを指すと解釈する。「葬送に参加し、忌に籠もって泣き焦がれて」いるのは、忌みに籠もって日が浅い時点での中納言の状態を指していると考えられる。したがってこれは「いつとなく」籠もるより以前のことでと推定でき、⑧は⑥に先行するだろう。

これを補強するであろう表現が⑥の波線部「ほうしにもならまほしく、「なに、かへたる身ともなくや」と思ふばかりにとゞこほり給えど」である。この部分を、室城氏は「私は、法師にでもなりたく、また、恋しく思うまま死んでしまいたい」と思うばかりに出仕もせずいらっしやっただけれど」と訳す。しかし、「とゞこほる」は、「ためらう」と解釈するべきであろう。「なに、かへたる身ともなくや」は、小木氏も室城氏も指摘する通り、『拾遺集』恋部一のよみ人しらず詠「よそながらあひ見ぬほどにこひしなば何にかへたるいのちとかいはむ(恋一・六五五・題しらず)」を引歌にする。歌意は逢わないうちに恋死にしたら、逢瀬とではなく何と換えた命と言おうか、ということであるから、この場面では、逢瀬と命を引き換えにした身でもないではないか、ということであろう。

命を逢瀬と引き換えることはあるが、中納言の場合は実際に尚侍と逢ったわけでもないの、俗世の生を変えて法師

になることは躊躇うが、と解釈すべきであろう。そのような中納言の心境を理解しない「殿の上」は、「なにしに、さてはいつとなくおはすらん」と非難めいた発言をするのである。

それでも尚侍の死の直後、「同じ蓮の露」を結ぼうと死を志すような心境であったのと比較すると、法師になることを躊躇っているのであるから、中納言には比較すると冷静さが戻っていると見えよう。やはり⑧は⑥に先行し、葬送の話題が出てるので、錯簡の中では⑧は前半に当たると考えられる。

ここまでを整理すると、①②↓⑩⑪③↓④⑤⑥、⑧↓⑥となる。

四一三、四十九日

⑥の次は⑦である。⑦は尚侍の四十九日であることが明示されている。

⑦四十九日に、をのがおのくくあくがれたまふ。中納言、のきのしのぶをつくぐくとながめで、いまははと（前カ）おぼすが、さしもなごりあはれに、なに、めとまる心地し給。(二六丁裏三〜八行目)

「のきのしのぶ」の表現があることから、この後に、『風葉集』にも採られた和歌「まことにやむすびあはせし忍草などあやにくに露けかる覧」から始まる⑫が接続するだろう。これについては、小木氏以降異論ない。

⑫ まことにやむすびあはせし忍草などあやにくに露けかる覧

と思しられたまえど、すぎにしかたのこひしくかなしければ、御めのとの宰相めしいで、「たれにもうしどの

みおもはれきこえにしかば、露のあはれもなさけもかけ給べしとはおもはねど、月ごろなれきこえしかば、いまは（行カ）と思ふは、いとなんかなしかりけり。すぎにし御心たがへずしたてまつりしを、なき御心にはあはれとおほしけるを、わが身にだにをこがましく、しれなくしき名をもながし侍りぬるに、思しる人も侍りぬべし。よのつねのまことの契に、かくまでおもひまどはんは、ことわりのことに侍りなん。心をはせん人は、中／＼などかあはれおかけ給はざるべきと、心やりてなん思侍」とのたまふに、これにもなみだにむせみて、御かへりことも申さず、おはしためらひて、「あさましかりし御ありさまを、あさからずおほしめしあつかひし御心ざしは、なにごとをいかにともおもひわかれば候はず。かたじけなしとのみおもひ侍しかども、ひごろはかくておはしますにこそ、思なぐさめて侍りつるを、いまよりはなに、いのちをかけ侍べき」と、そのをりよりも、きえぬべ（一九丁表五行目～二〇丁裏一行目）

この場面で中納言は、故尚侍の乳母であった宰相の乳母と話して内心を吐露している。先行研究は『集成』以外、ここに錯簡を指摘していないが、⑫と⑬では、中納言が対する相手が変わっている。

⑬けなる氣しきども、あはれとみ給。のちの御ことなど、つれなくつらかりし御事とも、なく、こまかにいとなみつるは、ありがたかりつる御心かなと、宰相中将もおろかならずおほえ給。御ゆえに、かくはかなくなり給ぬるぞかしと、うらめしくおぼすも、それもさるべき契にこそと、ひごろの御心のあはれさに、おほしめされけり。すぞろにむなしくなしておぼす覽中納言の御心も、心ぐるしくあはれなり。宰相もさてのみをはずべきならねば、なく／＼、とまる人のことゞもさたしをき、御はかへまいりなどして、中納言殿ももろともいで給心地ども、あへなく、かなしともおろかなり。（二〇丁裏一行目～二二丁表七行目）

⑫では宰相乳母と会話しているが、宰相中将がいれば、中納言は宰相中将と会話するであろうし、このような泣き言は言わないだろう。しかし⑬では宰相中将と共に居るので、『集成』が指摘する通り、この間に何らかの錯簡が想定される。呼称による宰相中将と宰相乳母の判別の難しさも関係している可能性がある。⑦⑫⑬はこの順で、錯簡を正したとき、最後に来ると考えられる。

四一四、⑧⑨帝と尚侍

⑧を再掲する。

⑧「すぞろなるもの思してをくりし。いみなどにさへこもりて、なきこがれたまふ」などきつて、「いまくしくよしなきことなり。みかどには、ながくびむなき物におもはれまいらせて」とおぼせど、われらが心あはせてしいで、しことなれば、えかくも物ものたまはず。(二六丁裏八行目～一七表丁五行目)

⑧については前々節で錯簡全体の中では前半かつ⑥より前だと推定した。⑧については後述することとし、⑧に続く⑨を示す。

⑨げにめでたかりしありさま、よの中の人、このごろあはれなるさたにぞしける。(以後白紙)(一七丁表五～七行目)

⑨を考えるにあたって押さえておきたいのが、桐壺帝と桐壺更衣は、帝と尚侍の人物造型・関係性の主なモデルであるという点である。桐壺更衣は夏に亡くなり、葬儀で三位を贈られ、その後更衣の生前の様子、人柄を周囲が偲び、帝が「後のわざ」につけても「こまかにとぶら」つたと描写される。

もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、こまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。（桐壺）

ここからすると、『しづくににごる』でも、⑨で尚侍の生前のすばらしさが人々に偲ばれたことが描かれた後に、⑤「ちたきまで御とぶらひあり」という描写があるのが自然に思われる。

また、『源氏物語』における思い合つた男女の死別といえは、源氏と紫の上の描写も参考になる。紫の上の葬儀の後、源氏は出家できずに忌みに籠もる。そして、以下に示す通り、紫の上の死後の評判が描かれ、源氏は出家を「思し立つ」が、「人聞き」を憚る。

さしもあるまじきおほよその人さへ、そのころは、風の音、虫の声につけつつ涙落とさぬはなし。ましてほのかにも見たてまつりし人の、思ひ慰むべき世なし。年ごろ睦ましく仕まつり馴れつる人々、しばしも残れる命恨めしき

ことを嘆きつつ、尼になり、この世の外の山住みなどに思ひ立つもありけり。……今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。されど人間きを憚りたまふなん、あぢきなかりける。(御法)

これに則ると、『しづくににごる』でも、⑧で中納言が忌みに籠もり、⑨で尚侍の「めでたかりしありさま」が描かれ、⑩で帝は早く出家したいと「思しめした」つ、という流れが想定できる。つまり、⑧⑨⑩↓④⑤⑥となる。第三章で⑩の直後には⑪③が来ると推測したので、併せて考えると、⑧⑨⑩③④⑤⑥となる。

五、復元案

以上のことから復元案を以下に示す。

- ①「：御こにせさせ給て、わが侍らざらむをりのかたみとも御らんぜよ。七日すぎなば、むかへとりてあづけたてまつらん」とおほせられて、いみじげなる御氣しきに、いとゞみ(錯簡カ)めみやも御袖しほるばかりになりぬるを、をのづからちかく候人は見きこえたてまつるに、なみだとゞめがたかりけり。
- ②との、うゑ、内侍督の事どもたまふ。「わかみやむかえたてまつりて一日ばかりおはしける、きさいのくらひをくらせ給けること」など、こまかにきかせ給に、「中納言は
- ⑧すぞろなるもの思してをくりし。いみなどにさへこもりて、なきこがれたまふ」などきゝて、「いまくしくよしなきことなり。みかどには、ながくびむなき物におもはれまいらせて」とおほせど、われらが心あはせてしいで、しことなれば、えかくも物ものたまはず。

- ⑨げにめでたかりしありさま、よの中の人、このごろあはれなるさたにぞしける。
- ⑩御かどは、つねならぬよと、ふかくおぼしとりつれば、なにごとくかずならず。七日すぎぬれば、よき日してわ
かみやむかえたてまつりて、見たてまつらせ給に、御かゞみのかげかはらぬものゆえ、はゝの御さまも思いでら
れさせ給に、おもひすてつるよも、心のやみはくるしかりけりと、いと心ほそくおほしめさる。
- ⑪ひめ宮、一ほんのみやになしたてまつらせ給て、その御かたに一のみやはおはしまさせたてまつらせ給に、かた
ぐゝの、あはれにも、おろかにおほしめされんやは。ともすれば、いだきあつかはせ給を、中宮は心づきなくお
ほしめさるれど、はゝのをはせばこそはめざましからめ、いま、でまうけの君もをはしまさぬに、ひめ宮の御ため、
ゆくすゑたのもしくおほしめしをきつるも、さすがにあはれにおほえさせ給へば、おほしもはなたれず、みたて
まつりなどせさせ給に、いまより氣しきことに、たゞうゑの御かほゝうつしとりて、又はゝかたさえそひ、なべ
てならぬさまを、
- ⑬いかばかりあはれにおほしめすらんとおもふに、われをもうしとこそはおほしめさるらめとおぼす。
- ⑭うゑはおほしめしたつ御ことも、心もとなくおほしめさる。
- ⑮ふし見には、かなしといへど、御いみもすゑつかたになりゆくに、一みやにことづけたてまつりて、こちたさま
で御とぶらひあり。おほやけざたなれば、さはいへども、よの中のひゞきにぞありける。なにゝつけても、めで
たき人の御ありさまにぞありける。
- ⑯中納言は、このよにはちぎりをはせざりける人に、をこがましく、いたくなげかじとおほせど、「たぐひなか
りし御さまは、なにならざらん人とて、おろかに思ふべかりし御ありさまかは。ほうしにもならまほしく、「な
にゝかへたる身ともなくや」と思ふばかりにとゞこほり給えど、いまはのきはにしも、あはれをしらせたまはん
の御氣しきは、この世ならでも思わするべきよしなかりけり。いかなる人を見るときも、つゆなぐさむかたは、あ

るべきならず。とのうゑ、いまくしくおこがましくもあり、「なにしにさては、いつとなくおはすらん」と、かたぐにのたまふも、ことわりなり。

⑦四十九日に、をのがおのくあくがれたまふ。中納言、のきのしのぶをつくぐとながめで、いまははと^(筋力)おほすが、さしもなごりあはれに、なに、めとまる心地し給。

⑫ まことにやむすびあはせし忍草などあやにくに露けかる覽

と思しられたまえど、すぎにしかたのこひしくかなしければ、御めのとの宰相めしいで、「たれにもうしとのみおもはれきこえにしかば、露のあはれもなさけもかけ給べしとおもはねど、月ごろなれきこえしかば、いまははと^(筋力)思ふは、いとなんかなしかりけり。すぎにし御心たがへずしたてまつりしを、なき御心にはあはれとおほしけるを、わが身にだにをこがましく、しれぐしき名をもながし侍りぬるに、思しる人も侍りぬべし。よのつねのまことの契に、かくまでおもひまどはんは、ことわりのことに侍りなん。心をはせん人は、中くなどかあはれおかけ給はざるべきと、心やりてなん思侍」とのたまふに、これにもなみだにむせみて、御かへりことも申さず、おはした^(しかり)ためらひて、「あさましかりし御ありさまを、あさからずおほしめしあつかひし御心ざしは、なにごとをいかにともおもひわかれ候はず。かたじけなしとのみおもひ侍しかども、ひごろはかくておはしますにこそ、思なくさめて侍りつるを、いまよりはなに、いのちをかけ侍べき」と、そのをりよりも、きえぬべ

⑬けなる氣しきども、あはれとみ給。のちの御ことなど、つれなくつらかりし御事とも、なく、こまかにいとなみつるは、ありがたかりつる御心かなと、宰相中将もおろかならずおぼえ給。御ゆえに、かくはかなくなり給ぬるぞかした、うらめしくおぼすも、それもさるべき契にこそと、ひごろの御心のあはれさに、おほしめされけり。すぞろにむなしくなしておぼす覽中納言の御心も、心ぐるしくあはれなり。宰相もさてのみをはずべきならねば、なくく、とまる人のことゝもさたしをき、御はかへまいりなどして、中納言殿ももるともにいで給心地ども、

あへなく、かなしともおろかなり。

結果として、⑧と⑩と③と⑦でおよそ二丁分の入れ替えが発生するという錯簡を想定することとなった。確定できない要素が多々あり、推測に推測を重ねてしまったが、一つの仮説として示すこととする。

今後は史上の人物を参考にしたと考えられる要素を詳細に検討することで、『しづくににごる』の成立年代や成立圏にさらに迫りたい。

『うつほ物語』『源氏物語』は新編日本古典文学全集（小学館）、それ以外の物語は中世王朝物語全集（笠間書院）および鎌倉時代物語集成（笠間書院）、和歌は新編国歌大観によった。

注

- (1) 山岸徳平「ある逸名の物語とその本文」、『文学・語学』二八号、一九六三年六月、のち『山岸徳平著作集Ⅲ 物語随筆文学研究』（有精堂、一九七二年）所収
- (2) 小木喬氏が推定して以降異論はない。小木喬「しづくに濁る物語考」、『国語と国文学』四六卷六号、一九六九年六月、のち『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（笠間書院、一九七三年）所収
- (3) 沢田正子「しづくに濁る物語」、『体系物語文学史』第四卷、有精堂、一九八九年）、室城秀之校訂・訳者『雫に濁る』（『中世王朝物語全集』一一、笠間書院、一九九五年）、関本真乃「しづくににごる」考——一品宮と尚侍（横溝博・金光桂子編『中世王朝物語の新展望——時代と展望』花鳥社、二〇二三年）。
- (4) 注（三）拙稿。
- (5) 注（二）小木前掲論文。以降、小木氏の指摘・解釈はこれによる。

- (6) 樋口芳麻呂『木幡の時雨』・『しづくに濁る』物語について(『愛知教育大学国語国文学報』二七集、一九七四年二月、のち『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房、一九八二年二月)所収)
- (7) 田邊サヨコ『雫に濁る』物語錯簡考(『国語の研究』二三号、一九九五年九月)
- (8) 注(三) 室城秀之前掲書。以降、室城氏の解釈はこれによる。
- (9) 市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』巻四(笠間書院、一九九一年)
- (10) ただし実践女子大学蔵の底本を確認したうえで、日下幸男氏が「聖護院本『しづくに濁る物語』《翻刻》——伝為相筆本の道晃親王の臨写本(『王朝文学研究誌』四号、一九九四年三月)で紹介した聖護院本との異同を確認し、句読点等は一部私に改変した。
- (11) 小木氏は②について「葬送まもなくの事と考えられる。もしこのA段(稿者注・本稿⑩に相当)より後のことならば、この若宮迎えの事件を省くはずがないから、A段は②(稿者注・本稿でも②)以後と思われる」とする。
- (12) 『御産部類記録』等によると、後一条天皇、後三条天皇、堀河天皇、鳥羽天皇、崇徳天皇、後白河天皇、四条天皇、龜山天皇等の場合は誕生翌日に行われている。
- (13) 確認できる限りでは、後深草天皇については、「三夜の儀式、本宮の御沙汰にていとめでたし。やがて御湯殿の事あれば、つるうち、五位十人、六位十人ならびたつ。御ふみの博士：(『増補本系』増鏡)とあり、三夜の産養と同日である可能性がある。そのほか、君仁親王、二条天皇(孫王として誕生)、貞良親王は五夜、貴子内親王は三夜の産養と同日である。世仁親王(後宇多天皇)は五夜と同日。
- (14) 三夜の産養の主催者は時代によってかなり異なるが、作り物語においては、『今とりかへばや』では尚侍の父の大殿が主催し、『有明の別』の中宮の出産では、兄である左大臣が主催している。『吾の衣』では女御の場合は父関白、父が亡い西院の上の場合には兄の宮の宰相が主催している。改作『海人の刈藻』では、大納言の北の方の父が主催している。『しづくににころ』の場合、尚侍の父は既に亡いので、三夜は兄の宰相中将が主催した可能性が高い。
- (15) 勝山幸人『滴に濁る物語』の敬語について(『静岡大学人文論集』五七巻二号、二〇〇七年一月)。なお作中「おぼしめす」

は三十四例ある。②の二例を除くと帝二十四例、その他皇族五例、例外は三例のみである。そのうち一例では、宰相乳母の発言中に、中納言に対する「おほしめす」が使用されている。宰相乳母から養君である尚侍と、その兄の中納言への敬意は、他にも「おほします」等高く表現されている。これは宰相乳母の発話中であるということで、例外とできよう。女房から貴人への言葉遣いでいえば、『いはでしのぶ』や『我身にたどる姫君』『石清水物語』等でも同様の例および二重敬語が散見する。また地の文では、宰相中将に対して、一例「おほしめされけり」が用いられている（二〇ウ）。宰相中将が摂政となった後に「押しのごはせ給ふ」「おほしける」等の敬意の高い表現が用いられることからすると、作者が先走って敬意のより高い表現を用いた可能性はある。尚侍についても、贈皇后宮よりも以前から地の文で「おほしめして」（一ウ）が一例用いられることから、同様に作者が先走った可能性が高い。

(16) 臣下の身で、実母から息子に対して、「おほします」思しめす」、二重敬語の「せ給ふ」等、敬意のより高い表現は、『いはでしのぶ』『吾の衣』『我身にたどる姫君』『石清水物語』等では、普通用いられない。

(17) 全九例中、当該例を除き尊敬の意味で取れるものは帝四例、女院と一品宮、一品宮、玄宗がそれぞれ一例。それ以外の一例が使役である。

(18) 『いはでしのぶ』では十五例中十五例、『石清水物語』では十一例中八例、『吾の衣』では十五例中十五例、『我身にたどる姫君』では九例中八例が二重敬語である。

(19) 帝は、この一連の事件には直接的には無関係であろう中宮（後述する）に対しては、「母宮をもうし」と思っている。

(20) 「殿・上」の可能性もあるが、その場合でも殿の上の性格を示すことには変わりがない。

(21) 「吾の衣」ではそののち、四十九日が過ぎても籠っている大将に父関白が「僻々しきやうなる」と諭す。

(22) その夫の関白も関係している可能性もある。

(23) 注（三）室城氏前掲書も指摘する。

(24) ただし「おほしめすらん」の「しめ」は底本では補入であるため、祖本になかった可能性もある。「中納言は…おほすらん」であったとすると、中宮は、中納言が思いつめているだろうと思ひ、その直後「帝が私を「憂し」と思っているだろう」と考

えるのであり、この場合も思考の流れが飛躍しすぎている。

(25) 片岡耕平「從産穢内迎取養育」考——中世の穢観の側面『年報中世史研究』三〇号、二〇〇五年五月、のち『日本中世の穢と秩序意識』(吉川弘文館、二〇一四年)所収)によれば、「産穢が神事の障りとして機能する期間は、一般に出産後七日間であり、出産後七日間は区切りとして意識されている。加藤美恵子「中世の出産——着帯・介添え・産穢を視座として」(『女性史学』一六号、二〇〇六年月)も参照。

なお、『うつほ物語』国譲下巻に「七日過ぎぬれば、尚侍のおとど、宮に聞こえたまふ」とあり、女一の宮は出産後七日が過ぎてから、その夫の母である尚侍と面会している。また『有明の別』では、中宮の出産に同席した女院について「七日のほどは、女院もかくてをはしますべければ」(卷三)とあり、この場合は産穢によって籠もっていることがわかる。現存『海人の刈藻』でも「二月の一日頃に、大納言の上、若君生まれ給ふ。引き替へたる御喜び、いとめでたし。「按察殿の上おはせましかば」と、あはれに思し出でたり。やがて関白殿より、七日過ぎて、迎へ取りてかしづき聞こえ給へば、「さうさうしきものから、をかし」と思す」(卷二)、『木幡の時雨』でも、「尼上、「これや二代の王よ」とかしづき奉り給ふ。御乳なども品良き人を尋ね取りて、「七日過ぎなば、少将の所へ迎へ奉らん」との給ふ」という表現があり、産後七日間を一区切りとする意識は時代が下つても保たれている。

(26) 『集成』は「中納言」に「錯簡アルカ」と指摘する。聖護院本では「中納言」とあり衍字の可能性もある。

(27) 『集成』は「おほし」に「しばし力」と指摘する。注(三)室城氏前掲書も「しばし」の誤りと解す。

(28) 注(一)山岸論文、注(二)小木論文三谷邦明「しづくににごる」(『国文学解釈と鑑賞』四六卷一―一、一九八一年一月)、注(三)沢田論文、注(三)室城論文、辻本裕成「王朝末期物語における源氏物語の影響箇所一覧」(『調査研究報告』一七号、

一九九六年三月)、注(三)拙稿等。